

JaCMESへようこそ!

ベイルートでレバノン政治の息吹を感じる

小副川 琢 おそえがわ たく / AA研特任研究員

ベイルート中心部に位置するJaCMESではレバノン政治の息吹が感じられます。周辺にある「殉教者広場」や「ハリリー廟」、カフェ「エトワール」、「リヤード・スルフ広場」といったスポットを、政治状況と絡めて紹介しましょう。



JaCMESとは

「中東研究日本センター」(The Japan Center for Middle Eastern Studies 略称JaCMES)は、AA研初の海外研究拠点として、国際的な共同利用研究施設として機能することを使命としており、私は2010年11月から特任研究員として常駐しています。JaCMESのオフィスは、そのホームページ(http://meis2.aacore.jp/base_beirut)にも記載されているように、レバノンの首都ベイルートにおける中心部、通称「ダウタウン」に位置しています。ダウタウンというと、周辺に繁華街があるような印象を与えるかもしれませんが、確かにレストランやカフェなどが並んでいる街路も存在して、それなりに賑わいを見せてはいるものの、ベイルートの代表的な繁華街であるアシュラフィーエヤハムラーほどではなく、むしろ「政治的な中心地」といったところです。というのも、JaCMES周辺には首相府や国会議事堂が至近距離に存在しているからで、閣議開催中や国会会期中に交通規制がしばしば行われるのを、オフィスの窓から観察することも可能です。

さて、JaCMESは2006年2月の設立以来、レバノンや日本などに関する様々な講演会や研究会を催し、研究成果をレバノン社会

に還元してきました。また、「ベイルート若手報告会」という名称の下に、日本人の若手中東研究者に当オフィスで研究発表をしてもらい、それに対してレバノンや他の中東諸国在住の研究者からコメントをもらう、といったことも行っています。更に、レバノンや中東に関する蔵書も徐々に増やしており、資料利用での来所も想定しています。以上のことから、JaCMESは中東研究者同士のネットワーク構築における、結節点としての機能を果たしているといえるでしょう。

研究生活

それでは、JaCMESを拠点にして、普段の私がどのような研究活動を行っているかという、研究テーマはレバノンを中心とする現代中東の国際関係となりますが、その関連でレバノン内政にも関心を寄せています。というのも、レバノンに存在する主要政治組織の多くが、サウジアラビアやシリア、イランといった中東の地域大国(時と場合によっては域外大国や超大国とも)と密接な関係を有しているため、レバノンの政治過程はこれら大国の思惑や、それら諸国同士の関係が織りなす中東域内情勢の影響を受けやすいため、レバノン内政の観察を通して中東の国際関係を把握することが出来るからです。

このようなテーマで研究を進める上では、JaCMES所蔵の文献資料を使うことは勿論ですが、レバノンや中東域内政治に関する研究者、更にはレバノン人政治家やジャーナリストらとの意見交換も重視して



「殉教者広場」全景。

います。2001年に初めてレバノンを訪問して以来、数多くの方々と様々な場所で会ってきましたが、最近になって知り合った英国や米国、ドイツ出身の若手研究者たちとは、意見交換をする際にJaCMESに来てもらい、当オフィスを紹介しています。レバノンの旧宗主国であるフランスや、ドイツや米国といった国々もベイルートに研究拠点を有し、それぞれが高いプレゼンスを持っていますから、レバノンの研究コミュニティにおけるJaCMESの存在価値を高める活動も、自らの研究と並行して取り組んでいます。

話がやや逸れてしまいましたが、文献資料と意見交換以外の研究手法としては、JaCMES周辺に存在する「政治的な場」に出向くことで、レバノン政治を「肌で感じる」ことを心がけています。ということで今回は、首相府や国会議事堂といった「当たり前」な場所以外のスポットを紹介してみましよう。

殉教者広場

最初に取り上げる場所は、ベイルート市の中心的空間である「殉教者広場」です。レバノン内戦中(1975~1990年)に、「キリスト教徒地区」といわれた東ベイルート





「ハリリー廟」の入り口。



リヤード・スルフの銅像とESCWAの建物。

と、「ムスリム地区」といわれた西バイルートを分けた通称「グリーン・ライン」上に位置していることから、周辺で激しい戦闘が展開された場所です。現在も、銃痕が残っている建物や、内戦によって建設が中断されたまま放棄されている施設が近くに見受けられますが、同時に復興・再開発もかなり進められてきています。

故に、殉教者広場はレバノンの現代史を語る際に欠かせない場所ですが、他方では近年のレバノン政治にも大きな関わりを持っています。2005年2月14日に、ラフィーク・ハリリー（以下、R・ハリリーと記す）元首相がバイルートで爆殺されましたが、当時レバノンを「支配」していたシリアの関与が疑われる中、シリアとの関係維持を望む勢力が同年3月8日に、関係見直しを主張する勢力が3月14日に、それぞれ数十万人規模の大集会をここで開催しました。現在のレバノン政治を二分する勢力である、「3月8日連合」と「3月14日連合」の名称は、両者がここで集会を開いた日付を記念して生まれたのです。なお、2011年3月13日には、R・ハリリーの子息であるサード・ハリリー率いる3月14日連合側が、ここで結成6周年記念式典を開きました。前日の12日から、機材や椅子などを運

び入れる作業が行われましたが、当日は穏やかな春日和の日曜日だったことも手伝って、数十万人が参集しました。

ハリリー廟とエトワール・カフェ

この殉教者広場の脇に位置しているのが、通称「ハリリー廟」です。ご覧のようなテント形式ですが、中にはR・ハリリーのみならず、爆殺事件で亡くなった側近やボディガードらの遺体も安置されています。それ故、3月14日連合側はここを「聖地」と見なしており、同連合にとって重要なイベントの前には、所属議員の参詣する姿が絶えない場所となっていますので、私も折を見て訪問しています。

さて、ハリリー廟にはR・ハリリーの生前最後の写真が大きく展示されていますが、それは彼がカフェ「エトワール」で側近らとコーヒーを飲み終えた後、店の前で車に乗り込もうとする際に撮られたものです。従って、サード・ハリリー率いる3月14日連合側は当然のことながら、このカフェに強い思い入れを持っており、所属連合議員や関係者の姿を見かけることが多々あります。また、国会議事堂の正面に位置していることから、出入りする議員や閣僚の姿を見ることが出来る場所ともなっています。先日は昼食を摂っていた際、ミーカーティー現首相が議事堂から出てくるところに遭遇して、背が高いのを改めて実感しました。

リヤード・スルフ広場

最後に紹介する「リヤード・スルフ広場」は、1943年にフランスから独立を達成したレバノンの初代首相を務めた人物の名を冠した広場で、写真からも分かるように彼の銅像が立っております。ここでは最近、レバノンにおける「宗派主義」（レバノンに存在する18の公認宗派に、主要な公職ポストや国会の議席を配分する制度）の廃絶や、刑務所内の囚人の待遇改善を求める集団が

座り込みを行いました。しかしながら、あまり広くない場所故に、参加者が入り乱れるように抗議活動を行うことになってしまい、道行く人々は何が行われているのか、よく分かっていない有り様でした。

なお、銅像の背後に見える建物は、国連「西アジア経済社会委員会」（The Economic and Social Commission for Western Asia 略称ESCWA）本部です。ESCWA加盟国の一つバハレーンにおいてシーア派に対する政権側の弾圧が続く中、2011年3月16日にはレバノンのシーア派組織である「ヒズブラー」や「アマル運動」支持者を中心とする抗議活動が、この本部前で行われました。また、パレスチナ自治政府が国連に加盟申請書を提出する直前の9月21日には、レバノン在住パレスチナ人がこの建物の周辺に2000名ほど参集し、加盟に向けたアピールを行いました。

最後に

以上、JaCMES並びに周辺の環境を説明してきましたが、今回紹介したこれらの場所も、首相府や国会議事堂と同様にオフィスから徒歩5分圏内に位置しています。今後もこれらの場所を適宜訪れながら、レバノン政治の観察を続けていく予定です。

JaCMES研究会風景。

JaCMESの書棚。



カフェ「エトワール」正面。